

平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	おおさかふりつせんりこうとうがっこう				②所在都道府県	大阪府
27～31	①学校名	大阪府立千里高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	国際文化科 480 総合科学科 480 計 960	
国際文化科	160	80	80		320		
⑥研究開発構想名	グローバル・マネジメント力を備えたリーダーの育成計画						
⑦研究開発の概要	課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクト（GC）4分野を取り上げ、ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を育むための教育課程、及び、高い社会貢献意識と高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させるための指導法を研究開発する。						
⑧研究開発の内容等	<p>目的・目標 グローバル・マネジメント力を備えたリーダーを育成する。それは、①高い社会貢献意識、②国際的課題についての多面的な視点と深い理解、③国際的課題について他者と連携・協調しつつ探究するマネジメント力、④ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行う力、⑤高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力である。</p>						
	⑧-1全体	<p>現状の分析と研究開発の仮説 本校は国際・科学高校への改編を機に、国・府の研究指定等を受け指導法を改善し成果を得たが、課題も明らかとなった。SSHにおいては、総合科学科で実験・観察・実習を充実させるとともに、課題研究の研究類型化と各研究類型に応じた指導法を構築した。また、研究停滞期における指導を工夫した結果、この5年間に学校教育自己診断の「将来の進路や生き方について考える機会がある」「課題研究の授業は知的好奇心を高めている」等に対する生徒の肯定的回答が10%以上向上した。全国大会等において優秀な成績をあげるとともに、平成25年度より連続して国際大会へ出場するようになった。</p> <p>一方、国際文化科については、「将来の進路や生き方について～」の肯定的回答率は向上しているが、「課題研究の授業は知的好奇心を～」の伸びは少ない。将来の進路や生き方についての思索と課題研究に係る知的好奇心の高まりが比例していないことは、グローバル・リーダー育成という観点、本校の教育目標や高大接続の観点から課題である。</p> <p>そこで、これまで研究開発した指導法も取り入れながら、国際文化科に適した指導法を開発するならば、課題研究の質が向上し、グローバル・リーダーの育成を図ることができると考える。そのため、次の仮説を立てる。</p> <p>仮説1. 2年次以降についてGCに係る課題研究のコースを設置し、指導教員チームを組織する。生徒の主体性を損なわない程度に、発達段階に応じたテーマを示す。それにより、グローバルな課題に対する高い関心と深い理解をもつ人材育成の裾野を拡大し、グローバル・リーダーの育成を図ることができる。</p> <p>仮説2. 企業とNGO、及び、日・米の取組について比較対照するとともに、地域の企業家等の支援を受け、実生活との関わりの中で課題研究を行う仕組みをつくる。それにより、現実に即した、柔軟かつ創造的な提案が行えるようになる。</p> <p>仮説3. GCやグローバルな課題に取り組む人たちとの交流や見学・実習の機会を増やす。それにより、生徒はモチベーションを維持し、進路や生き方について思索を深める。</p> <p>仮説4. リーダー層を育て、他の生徒を牽引する仕組みをつくる。それにより、優れた意欲・能力を有する生徒を育成・支援することができるようになる。</p>					

	<p>成果の普及</p> <p>全国のSGH校による生徒研究発表会へ参加し、成果の交流を行う。本校が研究開発した指導法等について資料化し配付するとともに、学校ホームページにアップロードする。国際公共政策学会やGCの会議等において提案できるよう努める。</p>
<p>⑧ -2 課題研究</p>	<p>(1) 課題研究内容</p> <p>研究領域として、GC4分野（労働、環境、人権、腐敗防止）を取り上げ、GC参画企業とNGOの取組の比較、また、日米の比較を通じ研究する。発達段階を踏まえテーマを設定する。1年次：①学校や企業において実現できるインクルーシブ・デザインとは？②外国人労働者との共存はどうあるべきか？③育児と仕事が両立できる社会とは？④政治活動にほんとうに必要な金とは？2年次：①インクルーシブ・ソーシャルビジネスはどうあるべきか？②グローバル展開する企業における雇用のあり方はどうあるべきか？③職場における女性の地位を向上させるには？④企業と政治の関係のあり方はどうあるべきか？</p> <p>(2) 実施方法・検証評価</p> <p>1年次は、大阪大学、関西学院大学、GCジャパン・ネットワーク、アジア太平洋人権情報センター等と連携し、国連、国際的な課題、GC等についての講義・研修等により理解を深める。論文作成のプロセスについて習得し、課題研究に取り組む。GC課題研究コースを設置し、80名以上の生徒が同コースを選択するよう促す。</p> <p>2年次、同コースの生徒は1年次の学習を踏まえ、仮説を立て研究を発展させる。大学、Anti-Defamation League(名誉毀謗防止組合 国際的NGO)等と連携し、サマーキャンプ(阪大)、米国研修を実施する。中間発表会后、地域の企業家等における相談等を踏まえ、課題研究を改善し年度末の研究発表会において発表する。GCジャパン・ネットワーク主催の会議等においても発表するよう努める。選抜チームは3月にも米国を訪問し、研究を深める。</p> <p>3年次には、選択科目「トピック・スタディーズ(TS)」を選択するよう促す。同科目においてGCをテーマとして取り上げ、英語により課題研究がさらに深まるよう工夫する。また、海外に発信・提案できるよう努める。</p> <p>検証評価については、定性的評価(個人内評価、教員評価、外部評価等)と、定量的評価(大学入試センター試験平均点の上回り率、TOEFL、民間教育産業のテスト等)を用いる。</p> <p>必要となる教育課程の特例等 特になし</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価</p> <p>課題研究以外の研究開発の内容・実施方法</p> <p>① 3年次の選択科目に「グローバル・スタディーズ(GS)」を新設する。この科目においては、TOEFL iBT対策に加え、英語による課題研究についての討議も行う。</p> <p>② ICT機器を用いた反転授業等を充実させる。</p> <p>検証評価</p> <p>上記定性的評価と定量的評価により検証評価する。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 特になし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 生徒全員にタブレット端末を持たせ、反転授業等により教育効果を向上させる。</p> <p>(4) 幹事校としての取組(該当する場合のみ記入) 該当なし</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>平成27年度より、SET(スーパーイングリッシュティーチャー)*を配置する。 * 大阪府教委が平成27年度より採用する教員。英語4技能を高めるため、TOEFL iBT等を活用した指導を行う。</p>

ふりがな	おおさかふりつせんりこうとうがっこう	指定期間	27～31
学校名	大阪府立千里高等学校		

平成27年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）									
		25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数									
a	SGH対象生徒:								60人
	SGH対象生徒以外:	40人	40人						20人
目標設定の考え方: SGH対象生徒について社会問題への関心増とともに3倍に。学校全体として、現状の倍近くに引き上げ。									
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数									
b	SGH対象生徒:								7人
	SGH対象生徒以外:	4人	4人						3人
目標設定の考え方: SGH対象生徒について3年間2人ずつ増、その後維持。目標は現状の約2倍。									
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合									
c	SGH対象生徒:								40%
	SGH対象生徒以外:	10%	10%						10%
目標設定の考え方: SGH対象生徒について3年間毎年度約10ポイント増。									
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数									
d	SGH対象生徒:								5人
	SGH対象生徒以外:	人	1人						1人
目標設定の考え方: SGH対象生徒について2年め以降3年間毎年1人ずつ増。									
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合									
e	SGH対象生徒:								70%
	SGH対象生徒以外:	45%	45%						45%
目標設定の考え方: SGH対象生徒について3年間毎年5～10ポイント増。									
(その他本構想における取組の達成目標)									
f	SGH対象生徒:								
	SGH対象生徒以外:								
目標設定の考え方:									

1' 指定4年目以降に検証する成果目標

		25年度	26年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	目標値(34年度)
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合									
a	SGH対象生徒:								60%
	SGH対象生徒以外:	45%	45%						50%
目標設定の考え方: SGH対象生徒について3年間毎年度5ポイント程度増。									
海外大学へ進学する生徒の人数									
b	SGH対象生徒:								9人
	SGH対象生徒以外:	6人	6人						3人
目標設定の考え方: SGH対象生徒について3年間毎年度ほぼ2人増を想定。SGH対象生徒以外については、ほぼ現状維持と想定。									
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合									
c	SGH対象生徒:								70%
	SGH対象生徒以外:	-	-						30%
目標設定の考え方: SGH対象生徒について5年後70%に影響ありと想定。									
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数									
d	SGH対象生徒:								8人
	SGH対象生徒以外:	-	-						4人
目標設定の考え方: SGH対象生徒について卒業生の10人に1人。									

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数							
	人	0人						16人
	目標設定の考え方: 国外研修の意義が伝わるとともに年間計画に位置付けるようになるため、毎年度2人程度増と想定。							
b	課題研究に関する国内の研修参加者数							
	人	0人						120人
	目標設定の考え方: 完成年度には半数以上が何らかの研修・フィールドワークに参加することを想定。							
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数							
	校	0校						4校
	目標設定の考え方: 年間計画の調整を伴うため、2年ごとに1校増と想定。							
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	人	10人						48人
	目標設定の考え方: 年間計画の調整を伴うため、初年度は難しいが、完成年度には2年生各テーマグループに2人を2回。							
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	人	0人						24人
	目標設定の考え方: 年間計画の調整を伴うため、初年度は難しいが、完成年度には4つのテーマに5,6人を想定。							
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数							
	人	1人						8人
	目標設定の考え方: 大会のテーマが関係するとともに、年間計画の調整を伴うため、2年ごとに2人増と想定。							
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)							
	30人	30人						45人
	目標設定の考え方: 年間計画を調整し相手側と連携し留学生を増やすよう取り組むため、2年ごとに5人増と想定。							
h	先進校としての研究発表回数							
	回	1回						4回
	目標設定の考え方: 1～3年次までの指導方法の研究開発を振り返り、役立つ情報を提供するため4年目より発表回数を増。							
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
	×	△						○
	目標設定の考え方: 26年度に整備を始め、年度内に完成させる。							
j	(その他本構想における取組の具体的指標)							
	目標設定の考え方:							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度
全校生徒数(人)	911	950					
SGH対象生徒数							
SGH対象外生徒数							